

視察報告書 町田市議会 無所属会派 吉田つとむ記 2023.07.19

株式会社 おとづき商店

<概要>

山形県米沢市にある「株式会社 おとづき商店」を視察訪問しました。元来は、着物の卸売りを行っていた弟月 彰氏が創業。弟月千恵子社長が事業継承とその後の転換を図り、その事業内容が大きく変わり、現在は和装コートの扱いから、着物、コート、小物類まで多様な品目を製造販売しています。

ただし、看板は、日本唯一の和装コートメーカーと称され、自社ブランドのコート製造・販売を主にうたわれています。

事業は、米沢本店（企画・卸売事業部）、浪漫堂（おとづきミシン工房）、創造堂（おとづき手縫い工房）で構成されています。今回は、米沢本店（企画・卸売事業部）を訪れ、浪漫堂（おとづきミシン工房）も見学させていただきました。

事業内容は和装の分野で多岐に渡っており、有名デザイナーのアイデアを形にしたものや、「しゃばけ」の舞台衣装にも使われたとのことでした。

本来の視察目的である、新製品である「米沢牛ランドセル」は、そのおとづき商店の意欲的な取り組みの一環として誕生したものでした。



左が弟月千恵子社長



<所感>

（和装コート製造の長い前置）

着物の需要が極端に減ってきました。多くの産地では着物メーカーが閉業したり、細々と製造されているに過ぎない事態が生じている中で、和装コートの製造・販売に特化したことで、事業の継続が図られたと思っています。

私は、妻が「博多織」という伝統的な織物の最大手企業に務めていたこと、さらにその会社がオイルショック以降の激変で倒産したことを内外の情報で知っておりました。その企業にも知り合いの営業マンがいました。当時はとても羽振りが良かったことを覚えています。今から 50 年前の話です。

また、兄が博多の呉服店に務めていました。総合商社の丸紅が丸紅飯田と言う

時代で、繊維産業が日本で有数の産業の時代で、まだ、(和服の) 着物売り場がデパート内で幅を利かせていた時代でした。中州では、京都の着物と博多の博多帯が愛用されていました。1960年代のことで、私は子ども時代でした。

私は、1970年代に博多人形と言う伝統工芸品の卸売をメインにする会社で営業職をしていました。その世界では、着物や帯は着物のデザインの中に納まっており、着物産業の衰退より幾分遅く始まりました。私がいた会社は、そのブームが去る前に閉店したことで、私は全く別の分野で仕事を探しています。その後、職業として、伝統産業や工芸品に係ることが無く、現在に至っています。

そうした前置きを書くのは、和装着物と聞くと衰退産業であり、その中で盛衰には関心をもつことがほとんどなく、ノスタルジックな話として受け止める程度でした。中越地震の支援活動で新潟県十日町市を訪れると、そこではいまだ、着物が地元の重要産業に位置しており、そこでは、大掛かりな「十日町きものまつり」が開催されており、雪まつりのイベントでも、着物ショーがその中でも重要な位置づけがされていました。例えば、大学の卒業式や成人式では、着物の存在は重要な役割を担っている現実がありました。また、最近では、小学生の卒業式でも華やかな和洋装の着物を着ている児童の姿を見るものです。

そうした着物が利用されるケースは、業界人が趣向を凝らしてその愛用の機会を作り、増大を図っているのでしょう。それらを見ると、和装の着物が絶対的に衰退企業とは一概に言えない様相も感じるものです。

中越地震以降、しばらくして、浴衣を作り、今は何着も持っています。また、1年前の正月には、しばらく前に購入した着物を着て、人前に現れました。



2022年1月の着物写真と2023年7月16日の盆踊りの浴衣姿

(和装コートとその延伸)

「株式会社 おとづき商店」の事業内容は以下のように表記されています。

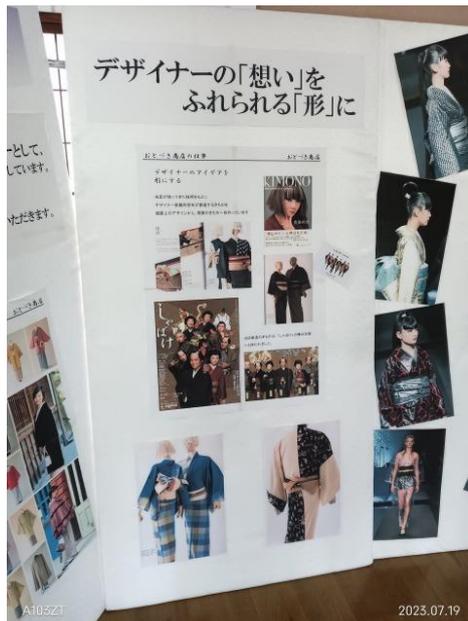
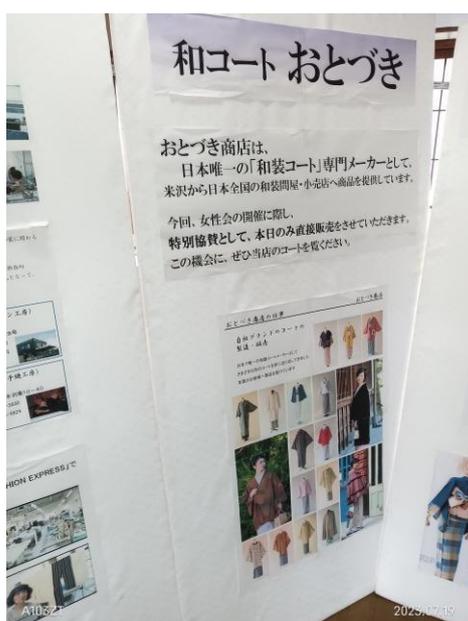
○和装二次製品の企画、卸売

- 和装二次製品を自社工場にて製造
- 着物・コート等の自社工場お誂え
- 和裁士による手縫いのお誂え
- 和裁士の人材養成
- 新デザイン・新縫技法の創造と提案
とされています。

自社で着物の工房を持っていることが特徴で、任意の注文が取れることとなります。また、きもの専門誌「七緒」とコラボして商品紹介をされることでその受注に対応していることも商売の基本になっているものでしょう。

あるいは、時代劇の「しゃばけ」の舞台衣装を製作したことや、デザイナーの紫藤尚世氏の紙面上のデザインを現実のきものを形作る仕事が、「株式会社 おとづき商店」の評価を高めている側面があるのでしょう。

ただし、ベースは自社縫製工場を持つこと、あるいは手縫い工房を持つことが、むずかしい仕事を受注する、あるいは自ら創作することが可能、さらにブランド力をつけているのだと思います。





まさか、献上柄の博多帯が出てくるとは夢にも思わず。

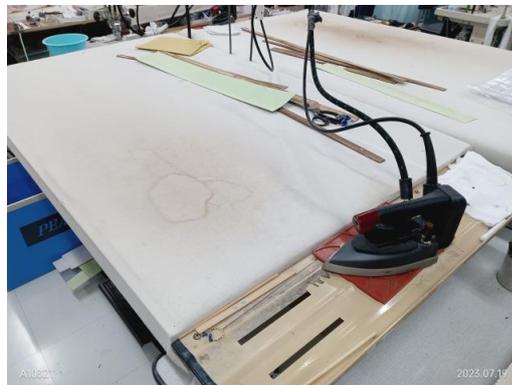
技術力を基本に、企画・経営能力のある会社のみがこの縮小業界である着物業界で生き抜いて行けるのでしょうか。

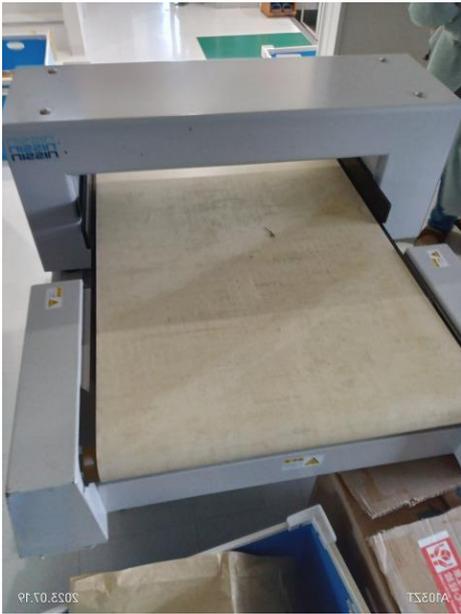
それまでご説明いただいているのは、田中 栄さんですが、私には、「株式会社 おとづき商店」の番頭役＝マネージャーに思えました。和装に精通している人材のようでした。

(浪漫堂・おとづきミシン工房)

本店とは別棟で、2階建ての建物でした。

詳細はカットし、写真で流れを説明





ミシン工房は、短時間の訪問でした。写真では、ミシンを撮影しそこなっています。工業用ミシンのトップメーカーである **JUKI** 製のものが在りました。

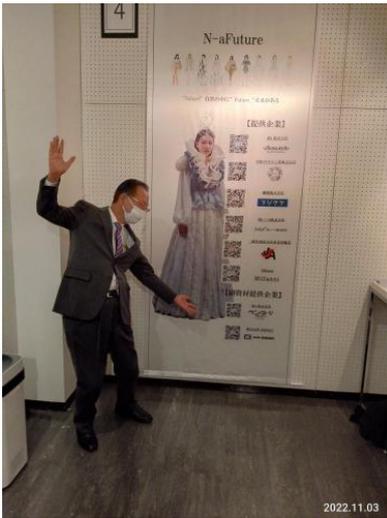
また、若い人材では、文化服装学院の卒業生がいました。文化と言えば、杉野（ドレメ）と並ぶ服飾界のトップの学校です。私は、昨年、文化の学園祭に行っています。



文化のキャンパスと文化祭



ファッションショーを鑑賞



展示作品を見て回る

(弟月千恵子社長について)

弟月商店の弟月千恵子社長は、高級牛肉として知られる米沢牛ですが、その革は廉価で海外に送られるか、処分されていた」ことを知り、「もったいない」の精神で、米沢牛革の使った米沢の名産品を造ってはどうかと、商工会議所や市役所に相談したというか、提唱したという話です。

もちろん、右から左に通る話ではなく、様々の障害があるわけですが、弟月千恵子社長自身がその事業化を図るという方法でことが前に進んだわけです。

ただし、これには、「弟月商店の弟月千恵子社長が経済人としての力量がある人物」という定評を得ていました。

それは、新型のコロナの流行の時期に、自社で扱う浴衣の端切れを大事にしまっていたものを、ミシンで縫い上げ、マスクに仕立て、令和2年の四月には、市内の全小中学生に寄贈して行き渡らせ、さらに高校生にまで配布するというニュースが山形新聞に出ています。この情報は、置賜郡の川西町まで伝わり、今でも、あのおとづき商店の社長さんだという反響が残っていることを、今回の川西町、米沢市、福島市の会派視察の中で知りました。米沢市内に限らない広がりを持った話として、伝わっていったわけです。

この端切れ製のマスク無料配布の話は、専門学校に間で及び、その頃にはマスクの販売を求める声上がり、今度は端切れではなく、生地から裁断縫製したマスクを販売することになり、千恵子社長（この頃はまだ専務だったと記載があります）の愛称“おとちゃん”を取り、“おとちゃんマスク”となづけて、話題になっていたそうです。



その次には、飲食業界用に、フェイスベールを企画販売しても話題になっています。これは、飲食業界の需要を満たすもので、米沢織製の生地を使ったタイプも制作され、かかわりを広げる工夫がされています。また、この話と実用を広めるにあたって、飲食業界で旗振り役をされた方も出たそうで、話題は、**Japan Times** でも写真付きの記事となっています。2020.6.23

物事を進める際には、「あの人」となんでも話題が上がる人物が旗を振らないと前には進まない、その人が「旗を振ったがために、事態が前進した」という経過であったようでした。政治家が旗を振ることとはだいぶ違っている感じがえます。

(ブランド牛革製ランドセル製造発売)

次に出てきたのがブランド牛革製ランドセル製造発売、に至るわけです。その進展した関係企業を表的に記載すると、次の通りです。

参加企業等

- ・株式会社おとづき商店（米沢市） 企画・プロデュース
- ・株式会社高島屋（東京都） ランドセル販売元
- ・株式会社米沢食肉公社（米沢市） 米沢牛の原皮提供
- ・栃木レザー株式会社（栃木県） 原皮のなめし加工
- ・ミドリオートレザー株式会社（山形市） ランドセル用革加工
- ・株式会社榮伸（東京都、工場：福島県） ランドセル製造
- ・米沢商工会議所 製品化に向けた助言・協力
- ・米沢市 新商品開発に係る支援（事業費補助金交付）

こうした流れ、波を作れるのが、株式会社おとづき商店の弟月千恵子社長の特徴なのでしょう。他の人がやっても無理だったのかも知れません。ただし、今はその事業を他の人がやっても可能かも知れない。そこまで弟月千恵子氏は、ステ

ージを作り上げたと言えるのではないのでしょうか。



株式会社おとづき商店を訪れ、ランドセルの話聞いたことで、鞣し(なめし)の方法が2種類あることを知りました。天然なめし(植物タンニンを使ったなめし)とクロムなめしがあり、今回のランドセルでは、天然なめし(植物タンニンを使ったなめし)が使われているとのことでした。その点にも、おとちゃんのやさしさが出ているのだと思います。

ランドセル造りでプロフェッショナルの業者を選び、その流れのまま、販売を高島屋とすることで、物の仕上げの絵が描かれているようでした。

現在販売中で、来年の届けとなって、新1年生が米沢牛革のランドセルを背負うという物語が出来あがっています。

きっと、その構想は時代にマッチするでしょう。

なお、地元では、上杉城のそばにある「上杉城史苑」で展示販売されているとのことでした。

弟月千恵子社長は、もっともっと先まで見込んだ構想を持っておられるようですが、それは別の機会として、まずは、ランドセルが順調に売れ、来年4月にはその米沢牛ランドセルを誇らしげに背負った新1年生を観たいと思っています。